

働く オージーさん

いろいろな職業の「オージーさん」に、仕事のこと、自分のことを語ってもらいます。どこにでもいるような、でも今まで会ったことはなかった。そんな普通のオージーさん達に、出会って下さい。

ひとりめ

靴職人の
ジョー

文・写真: 田部井紀子 www.kiku-kaku.com



私の名前はジオバキーノ・ピバレッツィ。「ジョー」と呼ばれている。イタリア人だ。1931年生まれ、今年で82歳になる。靴作りは13歳の時に始めた。父親も靴職人だったんだ。オーストラリアに来たのは1960年、29の時。戦争が終わってしばらくの間は、イタリア人含め、ギリシャ、ドイツ、ユーゴスラビア…ヨーロッパのいろんな国から大勢の人たちがこの国に移り住んできたものだよ。私は船に乗ってやってきたんだが、一隻に700人も移民が乗り込んでいた。イタリアからメルボルンまで、28日間の船旅、船賃は285ドル。当時としては相当な金額だった。でものんびりできて、いいホリデーにはなったよ。

メルボルンに着いてすぐ、靴工場で働き始めた。ヨーロッパ人ばかり80人くらい働いていたかなあ。この工場で、同じイタリア人の奥さんに会って、結婚したんだ。奥さんと付き合う

までは、工場のいろんな女の子にプレゼントするために、仕事とは別に夜なべして靴を作ったりもしたよ(笑)。工場で2-3年働いて、それからEast Brunswickで子供の靴の店を始めた。イタリアに行って1番質のいい皮を大量に仕入れて、それらを私自身の手で最高の靴に仕上げた。店は40年ほど続けた。

少し前から安い中国製の靴がたくさん輸入されるようになって、メルボルンの靴業界はだんだん下火になってきた。自分の年齢もあって、店は10年ほど前に閉めた。店のあった場所はカフェになってるが『Invicta Handmade Shoes』って店の名前は、まだ残ってるよ。靴作りの機械はすべて、自宅のガレージに移した。今はこのガレージ兼作業場で、1日に2~3足アップー部分を縫い合わせる仕事を請け負っている。あとは子供や孫達の靴を作ったりもしているよ。あんたも靴が必要な時

は、うちに来るといい。どんな靴でも作ってあげるから。

13歳で初めて靴を作った時、私は泣いてしまった。嬉しかったんじゃない。悲しかったんだよ。戦争で爆弾が落ちて学校がなくなってしまったから、父親の仕事を手伝うしかなかったんだよ。本当は勉強を続けたかった。3人の兄はみんな上の学校に行き、銀行のマネージャーや教師になった。羨ましかった。

私には息子が2人、娘が2人。孫が9人いる。みんなメルボルンでそれぞれいい仕事について幸せな暮らしをしている。毎週金曜日の夜には子供、孫、親戚が19人集まって、奥さんが腕を振ったイタリア料理を食べるんだ。楽しいよ。家族は私のTesoro、宝物。どんなにお金を持っていたって愛する家族がいなければ、何の意味もないさ。 文・写真: 田部井紀子